

群 教 セ	H01 - 01
	令元.272 集
	幼児教育

小規模園での保育を通して、多様な友達と一緒に遊ぶ快さを感じる幼児を育む

—「全体活動」と「思い思いの遊び」との相互作用に着目して—

特別研修員 大野 淑子

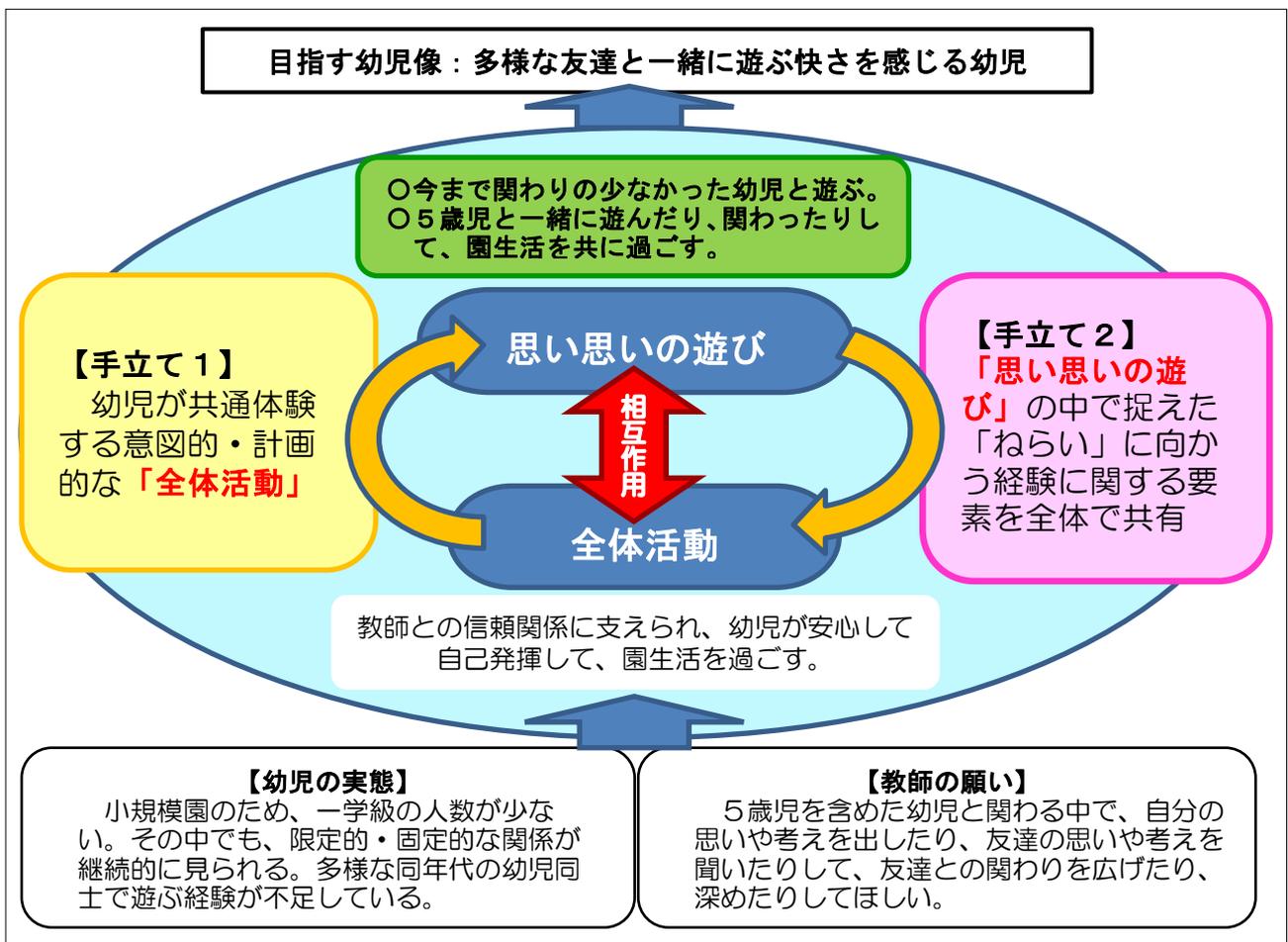
I 研究テーマ設定の理由

昨年度から全面施行された幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力が明確化され、各領域においても、新たな視点が追加された。特に「人間関係」の領域については、「ねらい(2)」において「工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい」という文言が追加された。これは、少子化や社会構造の変化に伴い、家庭や地域社会での子供同士が関わる機会の減少が危惧されている現状を受け、幼稚園で同年代の幼児が相互に関わり合い生活することの意義を重視し、幼児が友達と十分に関わって展開される生活を大切にすることの重要性を示したものと考える。

しかし、研究協力園は、5歳児5名、4歳児6名(本学級)、職員4名の小規模園である。関わる幼児の数が少ないだけでなく、限定的・固定的な友達関係が見られる。このような現状を改善するには、幼児が友達と一緒に遊びながら、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの様々な感情体験を味わい、友達と工夫したり協力したりして一緒に過ごす快さを感じられる経験が必要であると考え。そこで、小規模園における幼児の豊かな人間関係づくりの可能性を追究する必要性を感じ、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 保育改善に向けた手立て

本研究では、幼児の友達関係が広がったり深まったりする中で、多様な友達と一緒に遊ぶ快さを感じながら生活する幼児の姿を目指して、以下の手立てを行う。

手立て1	幼児が共通体験する意図的・計画的な「全体活動」 （ 思い思いに遊ぶ中で、友達や先生とやりたい遊びを考えたり、遊び方を教え合ったりして一緒に遊ぶことにつながるように、一日の生活の中で幼児が共通体験を得られる「全体活動」を意図的・計画的に設ける。 ）
手立て2	「思い思いの遊び」の中で捉えた「ねらい」に向かう経験に関する要素を全体で共有 （ 思い思いに遊ぶ幼児の姿から、教師が「ねらい」に向かう経験に関する要素を捉え、それを全体で共有する時間や場面などの状況づくりを行う。 ）

多様な友達と一緒に遊ぶ快さを感じるためには、幼児同士が互いに刺激し合い、様々なものや事柄に興味や関心を深めながら、心のつながりのある関わりを築いていくことが必要であると考えます。そのために、意図的・計画的な「全体活動」を実践し、幼児がその経験を生かして主体的に遊ぶことを促していく。また、「思い思いの遊び」の中の幼児の姿から、「ねらい」に向かう経験に関する要素を教師が捉え、それを園や学級全体で共有する機会を設ける。さらに、教師は幼児との信頼関係を十分に築いて、幼児一人一人が園生活の中で安心して自己を発揮し、主体的に環境に関わるようにしていく必要があると考えます。幼児が安心して自分の思いや考えを表現したり、友達に言葉で伝えたり、友達の思いや考えを聞いたりできるような援助を行うことで、友達の思いや考えに気づき、遊んだり関わったりするようになるだろう。このように、安心感を基盤にして、「全体活動」と「思い思いの遊び」との相互作用により、目指す幼児像に向かって幼児を育てていきたい。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 友達関係が広がったり、深まったりするように、意図的・計画的な「全体活動」を実践してきたことで、「思い思いの遊び」に変化が現れた。「全体活動」で共通体験した事柄に刺激を受けて、誘い合って集団での遊びを展開しようとする姿が増えた。また、今まで関わりの少なかった友達と遊ぶことが増えた。その中で、幼児なりに、試したり、工夫したりする姿、友達と一緒にやってみようとする姿につながったと考える。その結果、幼児は多様な友達と一緒に遊ぶ快さを感じるようになってきていると捉える。
- 幼児が多様な友達と一緒に遊ぶ快さを感じるようになるためには、教師との信頼関係が十分に築かれ、幼児が安心して自己を発揮して園生活を過ごせることが重要である。特に自分の思いや考えを伝える場面では、伝えられた側の幼児に対して、教師が「助かるね」「よかったね」などの言葉掛けを行うことで、間接的に言葉で伝えた幼児を認めることになり、友達関係を深める上で、有効な手立てであったと考える。

2 課題

- 小規模園において集団での遊びを楽しむためには、園全体での取組が必要になってくる。しかし、4歳児、5歳児それぞれの発達の段階や経験させたいことを考慮することが重要であることに実践を通して気付くことができた。今後は、教職員の連携を更に密にして保育に臨んでいきたい。

実践例

1 研究に関連する実践当日のねらい及び内容

(1) ねらい（4歳児・2学期）

友達に自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりしながら一緒に遊ぶようになる。

(2) 内容

- ・友達や先生とやりたい遊びを考えたり、遊び方を教え合ったりして一緒に遊ぶ。
- ・自分の思いを友達や先生に言葉で伝える。

2 幼稚園教育要領上の位置付け及び環境の構成の視点

「幼稚園教育要領解説」では、幼稚園教育の基本に関して重視する事項として、「幼児期にふさわしい生活の展開」を挙げ、「友達と十分に関わって展開する生活の中で、友達と関わることで、幼児が相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲が高まり、社会性が著しく発達していく大切な時期である」と述べている。また、幼稚園教育は遊びを通して行う総合的な指導ではあるが、本実践のねらいは、特に領域「人間関係」に強くつながると捉える。そこで、本実践において幼児が上述の「(2)内容」を経験するように、次の環境の構成の視点をもって保育を展開することとした。

- 友達や先生とやりたい遊びを考えたり、遊び方を教え合ったりして一緒に遊ぶための環境の構成。
 - ・運動会でいったダンスや競技の用具などを準備しておく。動きや遊び方が分からないときには、5歳児に教えてもらうように促し、憧れの気持ちをもつ状況づくりをする。
 - ・友達の遊びの様子が感じられるように、保育室内の遊びに用いる空間を園庭側に確保する。
 - ・友達のやっている遊びを知らせたり、仲間になって一緒に遊んだり、必要に応じて幼児同士の関わりを仲立ちしたりする。
 - ・「全体活動」として、5歳児と一緒に給食を食べる機会を設けることを継続する。
 - ・降園前の「全体活動」では、音楽に合わせて、個人持ちのボールをついたり投げたりする活動を提案する。「思い思いの遊び」に生かされるように、幼児なりのボールを使った遊び方を認めていき、教師もまねしたり、周りの幼児へ知らせたりする
- 自分の思いを友達や先生に言葉で伝えるための環境の構成。
 - ・幼児が自分の思いを友達に伝えている姿を教師が認め共感し、相手の友達が聞くことができるように場を整えたり、言葉を付け加えたりしていく。友達ともめ事になった際は、幼児が自分の思いを言葉で表そうとする姿を認め、思いを十分に受け止める。
 - ・友達の思いを聞きながら一緒に遊ぶように、友達の思いにも気付けるように言葉を掛け、互いに考えたり、相談したりできる場を設ける。また、友達に言葉を掛けられた幼児に対し、「助かるね」「よかったね」など、言われた幼児の気持ちを言語化し、間接的に言葉で伝えた幼児を認める。さらに、学級全体でその場面を振り返り、全体で共有する。

(1) 研究に関わる4歳児の教育課程

期	I		II		III			IV		V		
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発達過程	<ul style="list-style-type: none"> ・園生活に慣れ、個々に安定していく時期 ・好きな遊びを見つけて楽しみ、少しずつ周りの環境に目を向けるようになってくる時期 				<ul style="list-style-type: none"> ・友達やいろいろな遊びへの興味を広げ思い切り遊ぶ時期 ・自分の思いを出しながら、友達との遊びを楽しむ時期 ・園生活に慣れ、個々に安定していく時期 					<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを出したり、友達を意識したりしながら、自分なりに遊びや生活を進めていく時期 		
研究に関係するねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○先生や友達に親しみもち、触れ合ったり、一緒に遊ぶようになる。 ○自分のやりたい遊びを見つけて遊ぶようになる。 ○同じ場や遊びの中で友達と関わりながら遊ぶようになる。 ○自分の思ったことや感じたことを自分なりに表現するようになる。 ・先生や友達と触れ合ったり、一緒に遊んだりする。 ・友達のしている遊びを見たり、まねたりする。 ・自分の思いや感じたことを自分なりの表現の仕方です先生や友達に伝える。 				<ul style="list-style-type: none"> ○自分のやりたい遊びに取り組み、楽しむようになる。 ○同じ場や同じ遊びの中で、友達と関わって遊びを楽しむようになる。 ・ごっこ遊びや製作などを通して、いろいろな材料や用具を使い、自分なりの方法で表現する。 ・思ったことや考えたことを友達や先生に伝えながら遊ぶ。 ・友達と遊ぶ中で、自分の思いや感じたことなどを伝えたり、友達の思いを聞いたりする。 					<ul style="list-style-type: none"> ○気の合う友達と一緒に楽しく遊びを進めるようになる。 ・友達と遊ぶ中で、自分の思いや感じたことなどを伝えたり、友達の思いを聞いたりする。 		

(2) 本実践につながる幼児の姿

- 1学期の実践で、D児、F児が室内のブロックを室に見立てて、大きなブロックや室内の用具の下などに隠して、友達に見付けてもらう遊びを始めた。教師も遊びに加わり、室を隠す人と見付る人を交代しながら繰り返し遊んだ。教師は、幼児が「思い思いの遊び」として考えた遊びを取り上げ、後日「全体活動」として、共通体験ができるように、学級全体に投げ掛けて遊んだ。その後も、幼児が「思い思いの遊び」として、教師や友達を誘いながら、室内や戸外を使って宝探しをして遊んだ。
- 2学期より、5歳児の保育室で一緒に給食を食べ始めた。「おじゃまします」と挨拶し、自分の好きな場所を選び、5歳児と会話しながら食べた。食べ終わると、「またね」「じゃあね」と言い合って自分の保育室に戻って行った。また、降園前に5歳児と一緒に「猛獣狩り」や「花いちもんめ」をして遊んだ。
- 運動会へ向けて、5歳児と一緒に体操やバルーン、リレーなどに取り組んだ。バルーンでは、みんなと一緒に動くことで、きれいに揺れたり、膨らんだりすることを伝えると、友達の動きを見たり、音楽に合わせてたりして、動く姿が見られた。また、繰り返しリレーをする中で、E児、F児は、友達を誘ったり、チームの人数を確認したり、同じチームになった友達を応援したりしていた。5歳児のダンスの練習が始まると、B児、D児、E児は、5歳児の姿を見て、音楽を口ずさみながらまねをして踊っていた。
- 運動会で使う、「チョウの羽」の製作を投げ掛けると、A児が興味をもち取り組んだ。それを見ていたB児、C児、D児、E児、F児も取り組んだ。A児の絵の具の塗り方、模様付け方を見て、E児は「きれいだね」と言って、A児と同じようにしようと、繰り返し見ては、自分の羽を作っていた。
- B児、E児、F児は、2階や遊戯室へ列になって移動する際に、C児と一緒に手をつなぎたくて、「ぼくがつなぐんだよ」「私だよ」「誰とつなぐか、Cちゃんが決めるんだよ」など言い合う姿が見られた。

3 本時及び具体化した手立てについて

手立て1	友達や先生とやりたい遊びを考えたり、遊び方を教え合ったりして一緒に遊ぶように、 <ul style="list-style-type: none">・運動会でいったダンスや競技ができる状況づくりをする。・5歳児と一緒に、給食を食べる。・学級全体でボールを使った遊びを共通体験する時間を設ける。	全体活動との 関連

4 保育の実際

(1) 事例1

「みんなでボール遊びをしよう」

幼児の姿と教師の見取り・援助

4歳児全員で遊戯室に移動し、音楽に合わせて、ボールで遊んだ。教師が音楽をかけると、音楽に気付き、ボールを持ち、教師や友達の様子を見て、動きをまねしたり、友達同士でボールを付け合ったりして楽しんだ。曲の中で、幼児が自分のタイミングでボールに触れ、自由感をもちながら遊べるような部分を設けたところ、B児が、ボールの上に腹ばいなり、体を進ませ始めた。教師は、B児の考えた遊びを他の幼児にも紹介し、楽しさを共有したいと考えた。そこで、教師は、音楽に合わせてのボール遊びが終わったところで、全員にB児の遊び方を紹介し、幼児一人一人の手を引っ張り、ボールの上をお腹で移動することを楽しめるように援助した。幼児は、次々に「先生やって」「次は私」など言いながら、お腹の下にボールを置いて、手を引いてもらうことを楽しんだ(図1)。



図1 B児の考えた遊び方を紹介する場面

〈事後の幼児の姿〉

その後のボールを使った「全体活動」の中で、幼児から「前にやったお腹の下にボールを入れるやつ、やりたい」という声が多く、教師が幼児一人一人の手を引っ張らなくても自分でできるように、壁を使って自分で蹴るやり方を知らせると、それぞれの幼児がお腹の下のボールを入れて、壁を蹴って進むこ

とで遊んだ。始めのうちは、うまく進むことが難しいようであったが、繰り返しの途中でコツをつかみ、自分でできるようになり、友達と声を合わせながら、一緒に遊んだり、競争したりする姿が見られた。

(2) 事例2

「F児ちゃん、中側から抜かすのは、だめなんだよ」

幼児の姿と教師の見取り・援助

5歳児が「リレーやろう」「リレーやる人」など、周りの友達に声を掛けて、リレーが始まった。4歳児もその声を聞いて、仲間になったり、自分たちでチーム編成を考えたりして、遊び始めた。繰り返しリレーをする中で、E児とF児と一緒に走って競い合う場面になった。走っている途中で、F児がE児を内側から抜いた。すると、E児は、次の走者にバトンを渡すと、待機する場所へ行かず、集団から外れてしまった。少ししてE児は、「F児ちゃん、中（内側）から抜かすのはだめなんだよ」と言いながら、F児が待機している場所へ行った。するとF児は「いいんだよ、それは」と言った。その後、E児は教師のところへ来て、「F児ちゃんが約束を守らずに、中（内側）から抜かして、嫌だった。F児ちゃんが言うことを聞いてくれない」と泣きながら話した。教師は、E児の思いを受け止め、「それは嫌だったね、中（内側）からは抜かさない約束だったよね、F児ちゃんは聞いてくれないんだね」と話していると、近くにいた5歳児がF児のところまで行き、E児が泣いている理由を伝えた。5歳児に連れられ、F児がE児と教師に近づいてきた。5歳児が「内側から抜かしちゃったんだよね」と言ったため、教師は「そうなんだよね、内側から抜かされちゃって、E児ちゃんは嫌だったんだって。あと、聞いてもらえなくて、嫌になっちゃったんだよね」とE児の気持ちを代弁した。すると、5歳児が「僕もそれは（話を聞いてもらえないのは）嫌だな」と言った。F児は、それを聞いて、E児に悪いことをしてしまった、という表情になった（図2）。教師はF児の表情とE児のもう一回F児も含めてリレーをしたいという思いを汲み取り、「もう一回、約束を守って、真剣勝負をしよう」とリレーの再開を投げ掛けた。すると、F児は、E児の気持ちを理解した様子で、友達に声を掛け、再びリレーをしようとしていた。教師はE児が内側から抜かされて悔しい思いをしたことを幼児たちに伝えてから、リレーを再開した（図3）。



図2 E児とF児の気持ちを聞いて、援助する場面



図3 「がんばるぞ!」と言ってリレーを再開する場面

〈事後の幼児の姿〉

段ボールやごっこ、ペットボトルなど、様々なものを組み合わせて、自分たちのイメージに合う場を作った。その後、友達同士で相談し、太鼓橋下や園庭中央など、いろいろな場所に用具を持っていき、ごっこ遊びを展開する姿が見られた。また、自分たちで、「かくれんぼしよう」「鬼ごっこしよう」「ドッジボールしよう」と友達を誘い合い、以前より集団遊びで遊ぶ姿が多く見られるようになった。

給食は継続して年長児と一緒に食べている。これまでは、自分で席を決めていたが、同じ友達と一緒に座る傾向が見られたため、更にいろいろな友達と関わってほしいと考え、くじ引きで席を決める方法を導入した。偶然性を楽しんだり、友達と会話をしたりしながら給食の時間を楽しむ姿が見られるようになった。

5 考察

1学期より継続的に「全体活動」を行い、いろいろな友達と遊ぶ経験を重ねてきたことで、本実践のボール遊びをする際にも教師の動きをまねたり、友達と動きを合わせたりしながら遊ぶ姿が見られた。音楽に合わせてボール操作を行う共通体験の機会と、幼児が思い思いにボール操作を行う機会を意図的に設けたことで、多様な発想を促すことにつながった。そして、B児の遊び方を紹介する教師の働き掛けで、思い思いの遊びの中での幼児の「やりたい」という主体的な姿と友達と関わり合う姿につながったと考える。

2学期より、運動会へ向かう活動や給食を通して、年長児との関わりを意図的にもち、友達との関わりを広げ、深められるようにしたところ、誘い合って集団での遊びを楽しむ姿が多く見られるようになった。また、ルールの確認やもめ事があったときなどに、自分たちで考えたり相談したりして、解決しようとするようになってきた。本実践では、幼児が誘い合って始めた「リレー」が、もめ事により中断をした。しかし、年長児や教師に支えられながら相手の思いを理解し、遊びを再開する幼児の姿が見られた。このように幼児は、楽しいだけではなく様々な感情を経験し、それでも友達と遊びたいという強い思いをもつようになってきていると捉える。